

浄

土

昭和十年五月廿日 第三種郵便物認可（毎月一回一日発行）
昭和二十四年四月二十八日 運輸省特別後承認雑誌第三五二号
昭和三十六年五月二十五日 印刷 昭和三十六年六月二日 発行

第二十七卷

第五号



五月 五号 併合 五六

最新刊 浄土トラクト

村瀬秀雄著

月影抄

御法語の栞り

本誌「扉の御法語」として毎月筆執中のなかから著者が七編を選んで解説を付して新らたに浄土トラクトの一編として刊行

目次

- 一、上人のご日常（われ聖教を見ざる日なし）
- 二、浄土宗の意義（われ浄土宗をたつる心は）
- 三、道を求む（かくの如くして昨日もいたづらに暮れぬ）
- 四、決定の信（我は烏帽子もきぬ法然房也）
- 五、弥陀名号の功德（無礙光とは）
- 六、信仰のすがた（つみは十悪五逆のものも）
- 七、念仏を勧める（不怪大士の枝木瓦石を）
- 八、あとがき

東京都品川区上大崎一ノ七八二

申込先 法然上人鑽仰会

振替東京八二一八七番

浄土五・六月号 目次

表紙・扉絵

結城天童

さし絵・カット

加藤金一

法然上人のおもかげ……………恵谷隆戒（5）

念仏と生活……………藤吉慈海（2）

地藏尊の引導……………星野俊美（8）

インドの風俗……………斎藤昭俊（14）

天衣粉上野猿山……………鈴木成元（16）

法然上人の感化……………村上博了（20）

高僧伝 伊藤無関……………大橋俊雄（22）

学友の子女……………安藤正男（32）

ある手紙に添えて……………竹中信常（11）

人間……………（19）——声……………（30）——

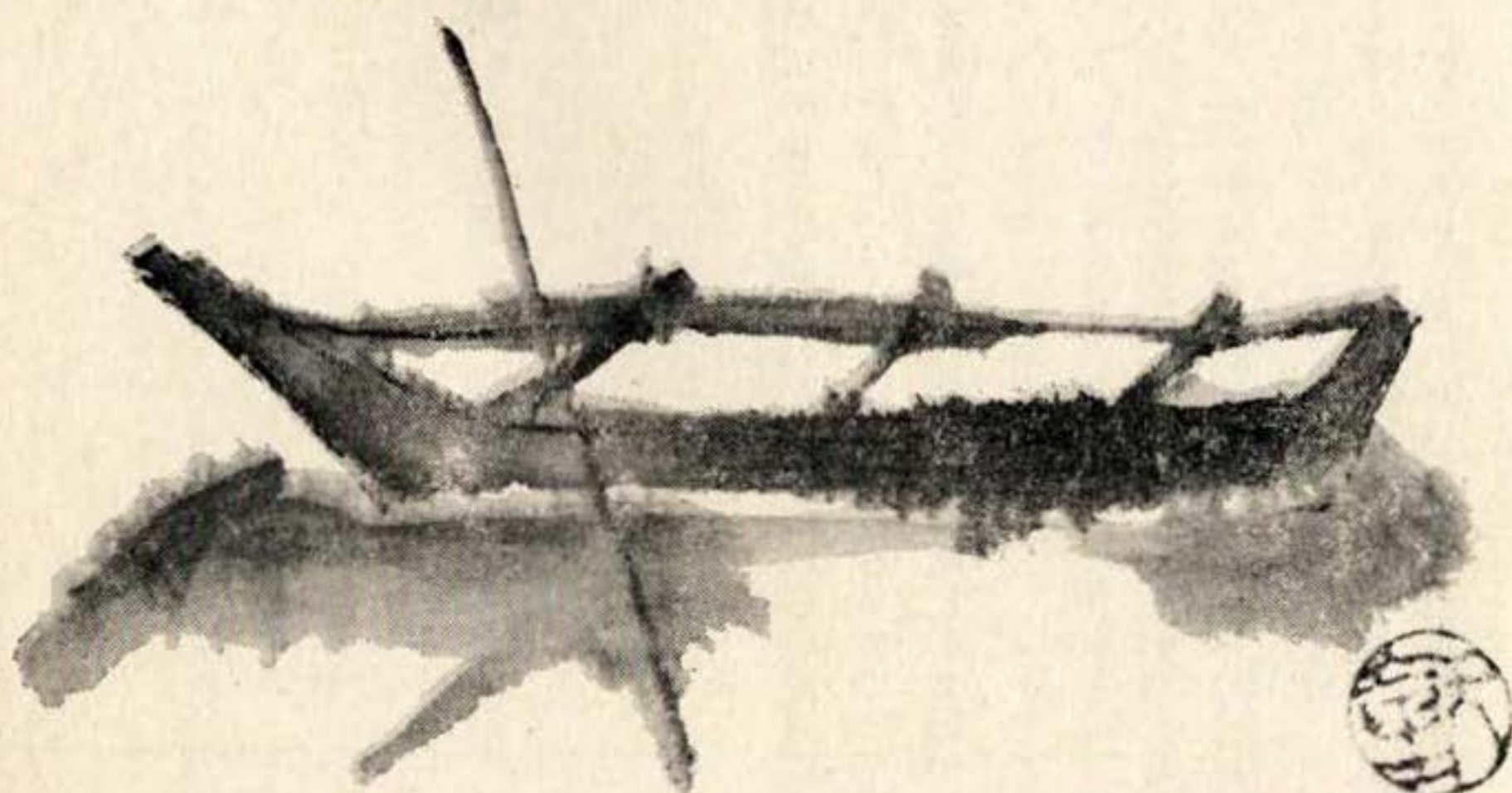
中国綺談 西池園記（下）……………牧尾良海（24）

浄土

五・六月号

善根ぜんこんなければ、念仏しゆぶつを修しゆして無上むじやうの
功德くどくをえんとす。余よの善根ぜんこんおほくば、
たとひ念仏しゆぶつせずともたのむかたもある
べし。しかれば善導ぜんどうは、わが身をば善
根こん薄少はくしょうなりと信じて、本願ほんがんをたのみ念
仏しゆぶつせよとすすめ給へり。

法然上人御法語



念仏と生活



藤 吉 慈 海

一

知恩院から「新編浄土聖語集」という浄土宗のアンソロジーが出版された。私もその編集委員の末席をけがしたが、その間、浄土宗全書をはじめとして多くの重要な浄土の聖典に親しむ機会を恵まれて、私自身にとっては大変ありがたいことであった。この聖典は多くの経論や御遺文等から、私たちの心に触れ、忘れられない、いわば印象的で且つ重要な言葉を選び、それらを一つの体系の中におさめたものである。その第十一章は「念仏生活」となっているが、それはさらに「念仏は生活の基調」と「念仏申す身は」の二節に分かれている。その中にえらばれた聖語を味ってみると、自ら念仏と

生活との関係が領解せられる。いま私はそれらの聖語について問題となる点を指摘しつつ、法然上人のみ教について私の理解のしかたを述べ、諸大徳の御指導と御叱正をお願いしたいと思う。

二

衣食住の三は、念仏の助業なり。これすなわち自身安隠にして念仏往生をとげんがためには、何事もみな念仏の助業なり。

ここで問題になるのは、衣食住の三は念仏の助業であるとおっしゃっていることである。何のための助業であるかということ、それは自分自身が安隠にして念仏往生をとげるためであ

るが、そこで主となっているのは念仏往生である。しからば上人は念仏往生ということをとどのように考えていられたであろうか。これは非常に大切な問題であって軽卒に取扱えないが、上人はおそらく現世においては阿弥陀さまの光明に攝取された生活をなし、肉体の消滅するときには西方の浄土に往生九品の蓮台に生まれると信じていられたであろう。それは「名利は生死のきずな、三途の鉄網にかかる。称名は往生のつばさ、九品の蓮台にのぼる」というようなお言葉によっても推知される。

上人が現世において、念仏を申す者が、如何なる利益を蒙るかということについては、自らの体験を通して深い確信があられたようであるが、それは「万事をすてて念仏を申すべし。証拠のみおおかり」と申していられることによっても知られる。お念仏を申すことによって、信仰の体験、光明摂取の体験を得るということが、何より大切なことで、二祖鎮西上人が見仏や念仏三昧を強調していられるのもそのためであろう。

しかし、その証拠がどんなものであったかについては、上人の自内証のことで、上人御自身はそのことについて、あまり具体的なことは申していらぬようである。しかし、よく注意して上人ののこされたお言葉を味ってみると、その片言

隻句の中にそれがあらわれているように思われる。たとえば、十八問答の中で、上人は「念仏に倦^{もろ}き人は無量の宝を失うべき人なり。念仏にいさみある人は無辺の悟りを開くべき人なり」と言っている。無辺の悟を開くということは、めったに申してられないが、ここでは珍らしく念仏にいさみある人は、無辺の悟を開くことができるとおっしゃっている。「証拠のみ多かり」と言うお言葉と合い合せてみると、まことに意味深いことである。

三

上人は学問をされた方であつたが、人々に対しては、学問をあまり重視してられないようである。知識を広めることも、尊いことにちがいはない。豊かな教養を身につけておくことも大切である。しかし、それよりも大切なことは念仏往生をとげることである。「学問をこのまんとおもわんよりは、ただ一向念仏して往生をとぐべし。……いくばくなくらざる知恵をもとめて、称名のいとまをさまたぐべからず」と申していられる。たしかに私共も反省してみると、いくばくなくらざる知恵をもとめて、お念仏を申すことを忘れがちである。往生をとげるということを第一義とせられた上人は「往生のためには念仏第一なり、学問すべからず。ただし念仏往生を信ぜんほどは、これを学すべし」と申していられ

られている。

四

さて、念仏と生活との関係に帰ろう。上人のお言葉の中には、念仏往生が主で、あらゆるものはその助業であるとあつて、念仏往生が目的で日常の生活はその手段であるように思われる節がある。これを目的と手段という風に解すると、現世の生活が如何にも軽視されているようであるが、現世の生活が単に軽視されるだけでは、近代の宗教としては完全なものとは言えないであらう。それで現世の生活が厭離すべきであるということは、現世の生活の否定である。

る。学問というものも念仏往生を信ぜんほどは、これをなすべきであるが、それ以上の学問は知識欲のとりことなるだけだと申したい。これは、学問に対して一見極めて冷酷な批評のようにも思われる。しかし、一切の学問が、念仏往生を信ずるためであるならば、大いにやってもよいわけで、念仏往生のさまたげになるならば、やってはならないというのである。しかし学問も念仏をひろめるための方便と解するならば、むしろ大いにこれをなし、且つそれを念仏弘通のために活用すべきであらう。ただし警戒すべきことは学問が単に学問のための学問となつてしまつて、主体的な解脱のために学問とならないことである。上人が「学生骨になりて、念仏やうしなわんずらん」と申したいられるのもそのためである。されば「浄土宗の学者はまずこの旨を知るべし。有縁の人のためには身命財を捨てても、ひとえに浄土の法を説くべし。自らの往生のためには、もろもろの囂塵ごうじんを離れて、もっぱら念仏の行を修すべし。この二事の外、全く他の営みなし」とも申したいられる。有縁の人のためには身命財を捨てても、ひとえに浄土の法を説くべしとは全く有難いお言葉である。しかも、これはわれわれのなかなか実行できぬことである。そしてまた、自らの往生のためには、わずらわしい世俗のことを離れて、もっぱら念仏の行を修すべしといひましめ

一応否定され、厭離せられた生活を甦らすことが大切であるが、上人においては、あらゆるものが念仏往生の助業として、念仏往生に集約され統一されているとみるべきであらう。念仏往生という目的のために、生活のすべてが賭けられている。念仏のさわりになる生活のしかたは捨つべきであるとも申したいられる。「現世をすぐべき様は、念仏の申されん様にすぐべし」と喝破せられ、「たとい余事をいとなむとも、念仏を申しこれをするおもいをなせ、余事をしし念仏すとは、思ふべからず」とも誠められたのである。ここに念仏に集約された生活のあり方が上人によって工夫され、その宗教的真実性が体験によって確認されていると見るべきであらう。

法然上人のおもかげ

——高野の明遍と法然上人の問答——



恵 谷 隆 戒

高野の明遍と云えば、鎌倉初期における三論宗の碩学とし

て一世を風靡していた有名な高僧である。彼は名聞利養のた

めの学問をすることをころよしとせず、三十七才のとき公

職を辞退して光明山に隠遁し、人生の大問題である生死の間

題を解決せんがために、専心修行にいそしんでいたが、五十

四才のとき光明山を出て高野山に登り、浄土教によらなけれ

ば生死の問題を解決することが出来ないことを悟り、専ら念

仏の修行にはげんでいたのである。あるとき、彼は法然上人

の著された選択集と云う書物を手にすることを得て、これを

一読し、法然上人は智慧第一のほまれのある人であるけれど

も、いささか偏執のきらいがあると思うて寝た夢に、大阪の

四天王寺の西門に、病人が多勢道ばたにねているのをあわれ

んで、一人の聖が、鉢に粥をいれて、さじをもって病人の口

ごとにいれている姿を認め、たれ人であろうかと、そばの人

に尋ねたところが、法然上人であると聞いて夢がさめた。そ

こで彼は思うよう、おそらく自分が選択集の文をそしったこ

とを誠められたものであらうと考え、それより以後、上人が

時を知り機を知った聖であることに気付き、自分の浅学不徳

を恥じて上人に帰依することになり、いつか上人を尋ねて教

を受けたいものであると念願していた。

ときたままたま、上人が四天王寺に滞在して、念仏の教を弘

めておられることを耳にし、このときこそ上人をおとづれる

絶好のチャンスであることを知り、信州の善光寺へ参詣のおり、四天王寺におもむき、法然上人をおとづれることになった。このとき使者を通じて来訪の旨をつたえたところが、上人は客殿にお出ましになり、これえと仰せられると、明遍は初対面の挨拶もしないで、いきなり「このたび生死をはなれるには如何がしたらよいでしょうか」と尋ねた。すると上人は、「南無阿弥陀仏と唱えて往生をとげることが、最もよい方法であると信じます」と答えられた。そこで明遍は更に質問をつづけて「たれもさようなことは心得ておりますが、念仏を申すとき、心が散り乱れ、煩惱妄念が起って来るのを何うすればよいでありましょうか」と尋ねると、上人は、「我々人間が凡夫としてこの世に生れて来ている以上は、心が散り乱れるのはやむを得ません。煩惱妄念を起さずして念仏すると云うことは、私も力およびません。私は、心はちりみだれ、妄念はきおいおこつても、口に名号をとえれば、弥陀の願力に乗じて、決定往生することが出来ると信じております」と答えられると、明遍は「これうけたまわらんがためにまかり出た次第であります」と云って帰って行った。上人の門弟たちは、この問答を聞いてあつけにとらわれ、明遍が帰った後で、そのわけがらを上人に尋ねた。すると上人が云われるに「心をしづめ、煩惱妄念をおこさずして、念仏するこ

とは、あたかも生れつきのまま持っている、目や鼻を切り取って念仏せよと云うことと同じである。さようなことは出来ない相談だ」とさとされたと云うことである。

この問答はきわめて平凡な問答のようであるが、よく味合ってみればみるほど、上人の思想信仰の香り高さを汲みとることが出来るのであって、我々人間は、たれでも、どこでもいつでも、絶えず不安・憂慮・絶望のとりことなつて、片時もそこから抜け出ることをゆるさぬものである。つねに危機の巖頭に立たずんでいるのが、いつわりのない人間の現存在である。経済の不安・生活の不安・死の不安・傷害の不安・病氣の不安、数えあげて来れば、数限りなく不安におびやかされて、心のやすまるひまもない。また家族の者に気をくばり、近処隣の人々に気をくばり、職場の上役や下役・同僚の者に気をくばり、限りなくとりこし苦勞の連続の中にあけくれしているのが我々の現実である。そうした不安・憂慮がこうじて来ると、自分の運命をかこち、世をはかなみ、人をうらんで、自殺の道を選ぼうとすることになり、たえず絶望の悪魔のとりことなつてゐるのが、人生の現実と云うものである。こうした不安・憂慮・絶望のきずなによって、がんじがらめに縛られているのが現存在であつて、このことを仏教では煩惱妄念と呼ぶのである。この煩惱妄念に日々夜々にも

だえ苦しみ、なやみつづけているのが凡夫である。三論宗の教では、かかる煩惱妄念は、我々人間が、生滅・去来・一異・断常の相対的概念にとらわれて、ものを見、ものを考えているからもだえ苦しむのであると主張し、そうした相対的概念を悉く否定して、絶対の無に帰すれば、生死の問題を超越して、真の自由を得た境地に到達することが出来るとするのであって、一種の虚無主義的主張をするのが三論宗の特色である。この点は、近代ドイツの虚無主義者であるニイチエの思想に酷似している。彼は、我々人間が真の自由を得ることが出来ないのは、善悪・美醜・有無などの相対的概念にとらわれているからであって、すべからずそうした相対的概念を否定して、本来の自己に還えることが肝要である。そこには自由自在の大活動がおのづから湧き起って来るとするのである。なるほど、そうした相対的概念を否定して、絶対の無に帰すれば、生死の大問題を超越して、悟の境地に到り得ることとは、論理的には誰も首肯するであろう。しかしながら、実践の場においては、そうすることは容易な業ではない。そこに三論の碩学明遍のなやみの種があるのであって、この問題は、法然上人にたづねるより外に方法がないと云うので、四天王寺訪問となったのである。このとき上人は、煩惱妄念をおこさずして念仏することは、自分も力およばず。自分は妄

念の起る中から念仏するのである。もしも、妄念を起さずして念仏することは、あたかも目や鼻を切って念仏することと同じであって、目や鼻を切れば、人間の資格を失うことになる。人間である限りにおいては、片時も妄念から離れることを許さぬものである。我々凡夫は、不安・憂慮・絶望から、いささかも超越することを欲するのではなくして、不安・憂慮・絶望の中を泳ぎ抜いてゆき、不断に念仏相続してゆくところに、おのづから如来の願力によって救われてゆくことを強調するところに、法然上人の思想信仰の香り高さがあるのである。近代の虚無主義者や実存主義者の主張するところは、一見合理的ではあるけれども、依然として觀念主義にとらわれているのであって、我々人間の具体的現実をみつめていないきらいがあるが、法然上人は、煩惱具足の凡夫に徹底して、ただひたすらに念仏相続することによって救われると云う、人格形成主義の信仰を鼓吹されたところに、偉大なる卓見があると云うべきであろう。(仏教大学教授)

地藏尊の引導



星野俊英

延命地藏經に地藏尊は毎日朝早く諸の定じように入いって六道を遊あそ化げして諸人を引導し、苦を抜き樂を与え給うと説いているのであるが、誰も極樂世界を求めつつも、その日その日のことに追われて仏の心になることが出来ず、六道輪廻りんわの因縁となるような罪を犯している。新古今和歌集には此の意を汲んで静かなる暁ごとに見渡せば

まだ深き夜の夢ぞかなしき
と式子内親王の詠める歌をあげているが、昔も今も亦同様にささげなく思われる。

地藏尊は、悟らざる此等の六道輪廻の大衆を如何にしても救済して弥陀の浄土に送りたいものとして、幾つかの誓願を

立てられた。

第一には、不取正覺ふしやうがくの誓願とて自らは菩薩の位にありながら、菩薩の位を離れて丸坊主のすかになって黒衣を着し、右手に錫杖、左手には宝珠を持つ僧形を現じて自ら大衆の通る街頭に立って救済の道に精進し、一人でも救われない人々のあるかぎりには菩薩の位、即ち正覺を取らじと誓われた。

第二には、代受苦だいじゆくの誓願とて何ん人でも苦しんでいる人があれば代って其の苦を受け、その人をしてその苦しみから逃がれしめてやりたいというのです。若し地獄で苦しむものがあれば、地獄の釜の側にまで立ち入って済すくってやりたいと誓われたのである。

かような貴い誓願を持つ地藏尊であるから、古くから日本全国津々浦々に至るまで信仰せられ、何んな山地に行っても地藏尊の祭られて居ない所はない。従って又、地藏尊の御利益を伝えて居ない所もない。病気で苦しむと言つては地藏尊を拜み、運が悪いと云うては地藏尊を拜み、望みを叶え度いと言つては地藏尊に参り、生活上の何んな欲望があつても、苦しみがあつても皆地藏尊に参詣する習わしとなつてゐる。

又、阿弥陀如来と地藏尊とは一体だと見る考え方があつて阿弥陀如来のもとには地藏尊であつたと説くのである。

法蔵の容は地藏すかたにかくせども

本地あらはす阿弥陀仏

六道の能化となるは阿陀弥仏

我が本願をのべんためなり

と徳本上人は述べて居る。

此の点からすれば阿弥陀如来の本願と地藏尊の誓願とは全く一致するのである。それであるから毎日念仏修行をする人をば一層地藏尊が引導し給う事があげられている、或本に

「此の地藏大士は西方極東世界に在つては、無辺身菩薩と称し、彼の土の二十五菩薩の中に於いて觀世音は先登せんとうとなり無辺身は殿後しんがりとなつて念仏の衆生を引摂いんじようす」

と述べ、又或る本には、

「念仏は即ち得力の処なり、且つ煩惱を除き、諸の障さわりを悉く滅せば更に何んのおそれかあらんや」

とあつて、念仏修行によつて六道輪廻のきづなを断ち切つて極樂浄土に往生する近道である事を説いているものである。京都壬生寺縁起続録にあげてある次の歌が思い出される。

ありがたや地藏菩薩の迎えにて

弥陀の御国え行かんうれしさ

又、本朝高僧伝に出ている沙門円能が、地藏尊の引導によつて、地獄極樂を見て廻つた話は有名であるが、其の外、壬生寺の地藏尊が日参する信者の男に地獄の有様を見せ給うた話奥州の孝子善之丞が、地藏尊の案内にて地獄極樂を廻遊した話などもよく人の知る所である。

又、お寺の入口、又は墓地の入口などに、地藏尊又は六地藏尊の石仏がよく建立されているが、特にお葬式の時の行列の場合、又は墓地へお参りの時などには必ず、此の地藏尊又は六地藏尊にろうそくや花を供える習慣が全国いたる所にあるが、此れは地藏尊の引導によつて六道の輪廻を越えて極樂浄土に往生せん事を願うものである。

山海里と云う本には京都の成る地藏堂にかかつて居つたと云う堂額の詠歌をあげて居るのでそれを紹介して置く。

南。無阿弥陀仏の六字は六道の

能化となりて六地藏尊

無。量無数かつも限らぬ衆生をば

無縁の大悲もらし玉わず

阿。弥陀ともまたは大日如来とも

太神宮とも云う時もあり

弥。の字には地藏菩薩もましますを

弥字一切の諸菩薩と云う

陀。の字には陀字八万の経あれば

大日経をも地藏経をも

仏。菩薩、天は大日、地は地藏

天照る影に五穀豊熟

(筆者は大正大学教授)

絵で見る法然上人伝

大正大学浄土学研究室編

誰にでも一目でわかる待望の法然上人伝記遂に完成！

国宝四十八卷伝をはじめ数多く現存する法然上人の伝記の中より
選出したすばらしい絵と豊富な現地写真をはじめ、珍らしい廬山
寺本選択集や二尊院本七ヶ条起請文等を網羅した画期的な編集、
インスタント時代の要望にこたえる最善のヒット版！

法然上人七百五十年御忌記念として是非お備え下さい。

B5判101頁・総アート・カラー3枚・
写真120枚、付年表・解説・教義・
上製美本・定価600円・〒70円

取 扱 所 東京都港区芝公園十九号地 浄土宗務所内

浄土宗教化団中央本部

振替東京61939 TEL(431)1382

ある手紙に添えて



竹 中 信 常

私の家は浄土宗で、先祖代々「南無阿弥陀仏」とお念仏をお唱えする。父母は非常に先祖を大切にし、朝晩仏壇には、お燈明やお線香を必ず上げ、毎朝たきたての温い御飯を上げる。

静かな朝、私はよく母がおりんを鳴らし、手を合せている後姿を何とも云えない気持ちで度々目にした。其の様な父母の姿を幼い頃から見ているので、物どころつく頃から私は、他所から何か診らしいものを戴くと、それがたとえどんなものであろうと一応は仏様へおそなえし、それからでないと口にしなかったものだ。幼い頃祖母に手をひかれお寺詣りや近所の御説教所へ有難いお話を聞きに行ったことなどを今でもよくおぼえている。お説教は余りにも私が幼いのでよく解らなかったが、長い時間きちんと行儀よく坐っていたので、よく和尚さんにほめられ帰りにお菓子や紙につつんでいたいたりしたことが今でもなつかしく想い出される。

戦時中空襲におそわれた時なども防空壕で爆音を耳にし乍ら、何時しか私は心の中でお

「年頃になると息子が嫁を貰う。すると外国は個人思想が発達しているから親父は親父、息子は息子というわけで、全然相手にしてくれなくなるそうだ。」

話相手を失った父や母達は、やりきれない閑をこの公園に来て日向ぼっこの中につぶすのだが、——敬老精神は爪の垢ほどもないとすれば、こんなところであつに年などどれん、と五十に近い私には人ごとではなかったいやがらせの年令とそしられようが、冷水

のクソ爺いと陰口をたたかれようが、年をとるなら日本万才、家族制度の有難味を、今さらの如くドイツで知らされたのである」
今年の秋、ヨーロッパをめぐって来た森繁久弥の旅行記の一節である。

何故、この文章を引用したのかということ、次に掲げる「信仰相談」を読んで頂ければわかると思う。森繁氏の有難がっている日本の家族制度も、手ばなしで有難がっているのではないことが知られるのである。

念仏を唱えていたものだ。幸い京浜地区に住んで居た我が家も無事に残り、平和な生活を迎えると共に長男が嫁を迎えた。

義姉は若いのに何事もよく出来、よく働いた、仏に対しては余り関心を持たなかった義姉が、急に二年位前から知り合いの方に進められ、日蓮宗の「南無妙法蓮華經」を唱えるようになってしまった。それ以来、毎年夏になると兄夫婦は身延山へ登り熱心に信仰している。私は嫁して来たらば、その家の家風と共に信仰もお念仏を「南無阿弥陀仏」と唱えることが本当の道だと思う。私が義姉のことを、それとなく母に話すと、母は人間は何でも信仰さえしていればよいので、「あれはいけない」等と云うことはない、本人の心で拝むのだから仕方がないと云うようなことを云い、余り気にもせず老後の楽しみに民謡を踊ったりして、何のこだわりもなく呑気に暮している。父も母と同一意見です。義姉は家の法事等の場合は何時でも何かと口実を作り墓参もせず、お念仏を唱えようもしない。私も何れ他家へ嫁ぎ父母が年を取り死んで終わら、後の仏様はどうなることかと、一人胸

に割り切れないものを感じる。

信仰は本人の自由とか云いますが、一軒の家にいて、血のつながりある家族である人がそれぞれ違った信仰をしていてよいものでしょうか。義姉は何事もよく出来るだけに人の意見等素直に聞き入れぬ勝気な性分の人です。兄にそれとなく話すと、そんなくだらないことで家の中を騒がさないでくれ等と云います。兄も信仰は本人の自由だから私に兎や角云われる必要はないと言います。私は考えれば考える程、どうしても割り切れない複雑な気持ちで毎日を生活しております。(東京・品川・渋谷敬子)

◎

キリスト教一色でぬりつぶされていると思われるヨーロッパでも、ことにカトリックの信者は、同じ信仰の者として結婚してはならないとされている。結婚の条件の一つに「同信仰」ということがはっきり定められているのである。日本の場合は、そういったことが全然ないので、後になってゴタゴタがおこるのである。それというのも、日本人の「信仰」

とか「宗教」というものに対する考え方が非常にアイマイで、且つ浅薄だからである。結婚と信仰というか、生活と宗教というか、とに角、人間が生きて行くについて「宗教」というものがいかに大切であるかということに本当に理解せずに、ウカウカと結婚してしまうから、あとになってトラブルがおこるのである。ここに第一原因がある。

今更、日本の家族制度がよいの悪いのといっても始まらぬが、ただこれだけはいえると思う。西洋の社会制度が今日のように「個人尊重」を軸として作り上げられるには、ヨーロッパ中世から近世へかけての大改革と、それ以後三四百年かかったの努力とがあったからである。日本ではそれが明治以後若干行われたのが戦争で中絶し、本当に社会改造が行われ始めたのが近々の十年。こうした時間の長短を考えずに、デモクラシーをうのみにして、やれ「信教の自由」だ「家族制度の廃止だ」などは、いうなれば、猿が衣裳をつけて芝居するのと同じく、片腹いたい次第である。渋谷さんの場合、生れた時からそのように育てられて来た御本人と、何年になるか知

らぬが、他家から入って来られた姉上とでは、ヨーロッパと日本とのちがいに似たものがあるわけで、それだけに信仰の点でしつくりゆかぬのは当然であろう。

そして、そのしつくり行かない原因をじっくりと分析してみると、どうもお二人の性格的相異が底流となつてゐるようである。勝気でバリバリしている姉上と、内心ではイライラしながらも黙って見ている洪川さん。それに念仏と題目という表現上の相異が加重して来て、ついには洪川家という「家族構成」の上の一つの危機的なものをもたらし来ている。母上はそれを老人的諦念によつて、森繁氏のいうように、公園ならぬ民謡の会に転化して強いて平静を粧つてゐる。老人の不関渉主義の典型的あらわれというべきである。

◎

そこで、申し上げたいことが二つある。その一つは、先にも述べたとおり日本の家族制度は目下変換の途中にある。それ故、姉上のように「もう変つたもの」として、一切の既往をふりすてて新しい家族制度であるかのやうにふるまうのはまだ少し早すぎる。といつ

て、洪川さんのように、生れた時から育つたその家庭環境をそのままの形で維持して行くとするのも時代的にズレがある。お二人で力を合わせて「新しい家」の建設に努力して頂きたいということである。

もう一つは「お猿の真似」はやめにして頂きたいということ。いいかえれば「信仰の自由」ということを。うのみにして、オオムのようにくりかえさぬこと。もっと真剣に「信仰」ということ、「自由」ということを考えて頂きたい。それには「何故お念仏ではないのか」「どうして題目でなければならぬのか」ということをよく見究めることである。

私をしていわしめるならば、念仏にせよ、題目にせよ、その昔、各宗の祖師が血のにじむような苦心の末に立てられた法門なのである。それを現在のわれわれが、少しばかり他人からすすめられたからとか、思わぬ偶然からヒョーンなより好みをして、こともなげに棄て去ってしまったら、他をけなしたりするといふことは、おこがましいというよりは言語道断な無礼である。もっと真剣になつて考え

るべきである。題目がよいということにいう前に、折角浄土宗の家に嫁し、名字もその家のに変つたのなら、少しはま心を以つて念仏を唱えるべきである。念仏を一口もとなえずに、ダメだダメだというのは、やがては題目もダメになる前提であり、ついには一生本当の信仰を知らずにすごすことになる。ひいては、力を合せて「新しい家」を作り上げる理想をも放棄することになってしまう。

最後にこういうことがいえる。自分もやがて年をとり、自分の家というものをしみじみと思わざるを得ぬようになる。そうなつた時のことを、よく考えてみることである。

(筆者 文学博士
大正大学教授)

×

×

×

×

×

×

インドの風俗



斎藤 昭俊

— 多彩な宗教行事 —

インドの風俗はやはりインドのおかれてい
る風土的条件なしには考えられない。早い話
が熱帯の内陸性気候のところは強い直射日光
をさけなければならないから、頭に布をの
せ、白い木綿のダブダブしたシャツ（クルタ
という）を着、パジャマをはく、パジャマの
代りにドウテイといって白い布を腰にま
いて、お尻のところではるものをつける。こ
うしたものは直接太陽の熱をうけず、更に発
汗作用を助けるものである。女性にもこれは
云えることで、インド女性は殊更にサリーを

愛している。長い一枚の布を腰にまいて、残り
を肩にかける。胸の部分はびったりした短い
ブラウスをつける。これはサリーをまいた腰
の部分と短いブラウスの間があいていて、そ
の部分とこのブラウスは半袖なので、手の部
分とが空気にふれる部分となる。このサリー
はそれこそ色とりどりで綺麗に見える。強烈
な太陽の下では他のどんな衣服より美しい。
こうした風土に生活するにはそれに適応し
た生活が必要であるが、熱いところだから、
裸ならいいだろうと思うかも知れないが、裸
は非常につらいものだ。熱い季節になると空

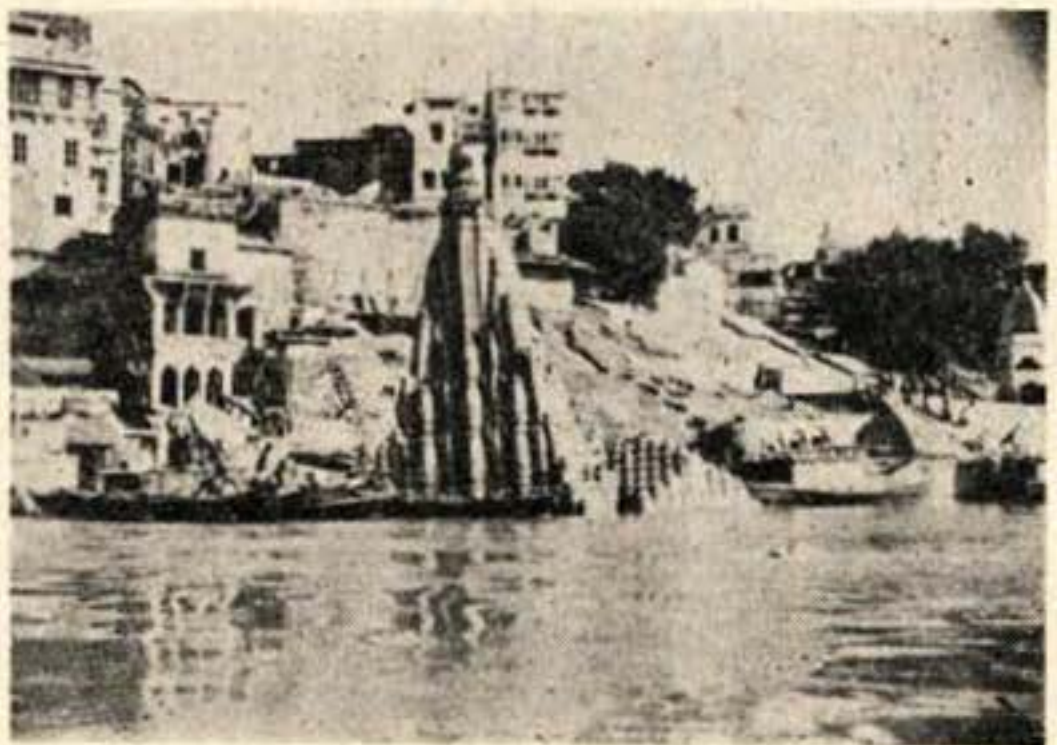
気が熱くなるので、この熱い空気にふれるだ
けで気が遠くなる。だから何か着ていなければ
ならないし、暑い時期はかえって毛布を被
っていた方がよくなってしまう。だからイン
ドでは裸は行者に多い。つまりヨーガ行者と
か、ジャイナ教の坊さんである。ジャイナ教
では空衣派に白衣派があって、空衣派の方が
裸で修行する。全裸になれる人は修業をつん
だジナで最高の位に達した人で、現在全国で
数名いるという。この人達はいつ、いかなる
処でも裸である。裸であること自体が修行な
のであるが、河を渡ってはならない、腰をお
ろすときは座るところを刷毛で払ってから座
る。乗物にのってはならぬ。同じところに定
着してはならぬというような規定がある。つ
まり河を渡ると微生物を知らずに殺してしま
うという、刷毛で払ってからでないとそこに
いるどんな小さな生物を殺してしまうかも知
れないという徹底した不殺生、アヒンサなの
である。乗物にのってはならないのも非常な
苦痛であるし、広大なインド平原を歩くので
全く思いやられる。そこで必ず二人で歩くこ
とになっている。つまり病氣などで他に迷惑

を及ぼしてはならないからである。又定着してはならぬことも非常につらいことであるが、これは愛着をたつ大きな修業と云えよう。これはインドの厳しい風土的条件を修業の条件としているものと考えられるが、これと対象的に順慮した宗教的諸行事がある。その一つに水浴がある。又水葬などもそうである。私のいたベナレスはヒンドゥー教の聖地で全国各地からガンガ河の水浴にやってくる。ベナレスという特定のところで水浴をするのが、大きな慰めであり、信仰となっているのである。ガンガ河の聖なる水（実は濁った汚い水）に沐浴し、この水を飲むことが、宗教的安心感を与える。この水を吸んで人に与えている者もある。ベナレスとは限らず、インドの多くの寺院は水をためた大きな池がある。ここで寺に参拝に来た人達が身を清めるわけなのだが、実はここで体を洗い、着物を洗う場所となっている。暑いところだけに水浴は大きな憩いとなっているわけである。従ってすべての宗教行事に水浴は密接に結びついている。私のいたベナレスには千ヶ寺を過ぐる寺があり、ヒンドゥー教の祭りが数多く

あるので、まるで毎月町ではどこかのお祭りが行われているような気がする。インドの民衆には祭日が大きなリクレエーションの意味をもっているし、その部分が大きな役割を果たしているように思える。それにプラスして伝統的因習と習慣、宗教ということを考えるものはやはり数が少いようであるし、習慣がすべて宗教的諸行事と結びついていると考えられる。

―巡 礼―

巡礼ということも大きな問題であるが、インドの人達は必ず巡礼に出たいと考えている。これは旅行をかねて、インドを知ること、に役立つわけだが、ヒンドゥー教では特に巡礼地を設けて北はヒマラヤ、東はプリー、西はサウラシトラ、南はダヌシコディと丁度四辺形に結んで、その途中で有名な巡礼地を尋ねるようになっている。インドは非常に広いので仲々全部廻るのは大変だろうが、それこそ大変な貧乏旅行をする。つまり巡礼地にはそれぞれダルマサーダ（無料宿泊所）があるのでこれに宿泊し、一日二十円か三十円の食事で巡礼する。勿論この巡礼には宗教的伝説



ベナレスの町

があつて、ベナレスで死ねば天国へ行くと云った種類のものである。

インドも近代国家への歩みを続けているのでこうした風俗もやがてはなくなっていくであろう。形はどうあろうと流れ続けて来た純粹なもののみが残ることを希望してやまない。

山猿野上紛衣天

くも に まごう うえ のの さる やま

鈴木 成 元

例年今頃になると考えることであるが、近年の気候異変は驚くばかりである。まだ二月だというのに四月中旬の暖かさが続いたり、そうかと思えば支那大陸で見るようなものすごい砂壁の風が吹き、目を開いておられない不気味な日もあった。それにしても雨が少く、例年の十分の一の雨量という水不足で、給水車の出勤を待つ地方もあるという状態である。こんな時にはいろいろな病気が流行するものであるが、わけても近年の流感はひどいものである。私も二週間程寝てしまった。常日頃病氣などというものはしたことがなく、新聞やラジオで伝える流感の様子などには気もとめなかった。そして何て弱い人ばかりいることだろうなどといって高をくくっていた。ところがどうも調子が悪い。確かに風邪らしい。とうとう私も流感にかかったかと思ったときにはすでに遅かった。けれども最初は「私も文化人の仲間入りが出来た」などといい、寝言をいって威張っていたが、それどころではなくなってしまった。どうせこうなるなら早く医者にかかって素直に寝ればよかったと思ってもどうにもならなかった。忙

しい時は、病氣にでもなって、一週間ぐらいゆっくり寝てみたいと思う時がしばしばであったが、実際病氣になって寝てみると、早く起きたいという気持が先にたつ。人間というものには勝手なものだをつくづく考えた。そして普通は気にもとめない壁掛のカレンダーに「病には病の値うち」とあるのを見て、この時ぐらい考えさせられたことはなかった。成程空の高さは、立っている時よりも寝ている時の方が高く感ずるに相違ない。

それはともかく寝ているときは、暇にまかせて、日頃は読まない新聞のすみずみまで読むのが日課の一つであった。その中に上野の動物園の記事がのっていた。猿山の縄張りはとてひどいようである。つまり上野の猿山には大小とりませ数十匹の猿がいるが、ノッポというボス猿（王様）を中心として花子という女王、ホウシ、アカという幹部など、そのランクが決まっているのである。実力のあるのは王様であるが、これは割合におとなしい。勢力もあり一番偉張っているのは女王である。つまり上野の猿山は「何とか天下」のわけである。

ところが女王の花子が何かの病気のために一ヶ月ばかり静養することになった。すると今迄第三位にランクされていたアカが、花子の子供と共に二位のホウシを痛めつけ、一躍女王の地位につき、猿山の一番高いところで睨をきかせはじめたのである。そして花子の入院で一時もめた猿山も静かになったのである。



る。

花子の病気も一ヶ月位で全快し、いよいよもとの猿山にもどることになった。しかしこの間に猿山のランクは一変しているので、急に花子を猿檻の中に入れたのでは、また争いがあるに相違ないと予測し、動物園側としては山羊二頭を檻の中に放して、それから花子を入れたのである。花子は早速自分の子供をかかえて猿山の頂上かけのぼったが、自分の留守中女王の位置にあったアカが、前女王の花子をさんざん痛めつけたあげく、花子を猿山の頂上から引きずり下ろし、半死半生の目にあわせ、名実ともにアカが女王になった、と各新聞同様の記事であった。

ところがそれから数日後のラジオ（趣味の手帖）で、上野動物園の古賀園長が、いろいろな動物の話の途中、この猿山事件にふれられ、私もそれを興味深く聞いた。つまりこの記事が新聞に出た後、それを読んだ沢山の読者から「どうしてそんな可愛想なことをするのか、事前にどうにかならなかったものか」等々、かなり多くの投書が動物園にあって、その答に汗を流したとのことである。

成程、花子を檻の中に放した時、アカとの間に少しのいざこざがあったことは事実であるが、新聞の伝えるほどではなく、事実はどうであったという。それは以前にもそのような事件（といっては大げさであるが）があったようだ。動物園側としてもこのことを十分に考慮に入れ、花子を放す前にあらかじめ、数日の間小さな檻の中に花子を入れたまま、猿山の檻に入れて様子をみたのである。すると女王のアカをはじめ、二、三の猿がやはり花子にイタズラをして少し睨みあったようである。しかしボスのノッポが花子をかばってアカたちを叱るので、イタズラも数回でなくなったというのである。

これで大丈夫だということがわかり、いよいよ花子を檻の中から放そうとしたけれども、念のために山羊二頭を檻の中に放して猿達の注意をひくようにしたというのである。そして花子を放したのである。このとき、やはりアカと花子との間に少しの争いはあったが、新聞記者連中の写真入りで報道したほどではなかった（なるほど、そういえば、闘争中の写真は一枚もなかったように記憶してい

る。それはともかく、今日はアカが女王であることには間違いないが、猿山は誠に平穩であるという。

この話を新聞記者連中はどういう心算^{つもり}でさせたのであろうか。当日特別の記事がなかったからというだけではなく、何か意味があったのであろう。しかしそれはそれとして、私は私なりに非常に興味深く読み、そして聞いた。しかしよく考えてみると、このことは何も上野の動物園ばかりでなく、放し飼いで有名な九州の高崎山など、猿の社会には多くあることであり、殊更に上野動物園ばかり取り上げる問題ではないと思う。けれどもここで単に猿の喧嘩だと面白がっては全く意味がない。このようなことは人間社会にもよくあることではなかろうか。政治・経済・宗教などみなしかりである。何か馬鹿にされているみたいな、クスグツタイ気持のするのは私ばかりではないと思う。

猿山ではしょっちゅう喧嘩が絶えないようである。しかし、この喧嘩も他の外敵が侵入して来るとすぐ中止し、団結して外敵に向かうようである。つまりいつのまにか内輪の喧

嘩は中止して、外敵の方に注意をひかれるというのである。このような猿の習性を利用して花子の場合にも山羊を放したのである。猿は猿なりに彼等の生存を尊重するのであろうか。

それはともかくとして、日本仏教の歩みをこの猿山騒動にあてはめることは妥当でない。けれども、無理にあてはめて考えることも満更無意味ではなさそうである。仏教伝来の当時は、仏教の正非をめぐる蘇我・物部の戦いがあり、鎌倉初期になるとまた新旧の対立をめぐる論争があり、近世になってキリスト教伝来の当時にも一もめがあったことは事実である。つい最近はまだ新旧宗教の問題をめぐるいろいろと論議がもちあがり、それもそろそろ下火になってきたようである。これらの問題が持ち上る前後には必ずといってよいほど、各教団、あるいは宗派の中に派閥争いなどがあるようである。しかし、この派閥争いも、より重大な問題に直面すると自然と消え、一致団結して当面の問題にぶつかるから面白い。こうしてみると。三本毛が足りないといわれる猿の社会も人間の社会

もそう変りはないということになる。勿論学問的にいえば、猿は道具を使うことは出来るが、道具を作ることとは出来ないとか、猿と人間は染色体が異るとか、相い入れない全く根本的に異るところがあり、比較するほうがどうかしているが、共通点を見い出すことは必ずしも不自然とはいえないであろう。

ディズニーの記録映画であったか。ちょっと記憶忘れをしたが、やはりこれに似た場面を見たことがある。それは見るからに広々としたアフリカ大陸の大平原で、いろいろな動物達がのんびりと遊んでいる中に、派手な縞を粹に着こなした縞馬が仲間喧嘩をしている場面があった。それを見た私は、丁度ラグビーかフットボールの試合を見ているような気持ちになり、御機嫌になっていたが、突然びっくりさせられた。というのは、何処からか森の王者ライオンがこの縞馬の群を見つけ、凄じい勢いで突進して来たからである。これを嗅ぎつけた縞馬は一瞬耳をそばたて夢中で逃げるのである。それはまたしつこくせまる敵を振り切りながら、ボールを持ってトライする状態にも似たものであったが事実はそのな

生やさしいものではなく、生死をかけた逃走だけに真剣そのものであり、全く迫力があつた。けれども遂に追いつめられてしまった。

どうなることかと息を止めて見つめていたが、数十匹の縞馬は頭を寄せ合つて円陣をつくり、ライオンが近づこうとすると俊足で蹴り上げ、敵をある一定の距離までしか近づけないのである。そしてつい今迄争っていたものの、お互いに相手をかばいながら、みるからに団結して外敵を防いでいるのである。これを見てみるとちょっと滑稽にも見えたが、本当に気持がよかった。百獣の王といわれるライオンもただ鋭い目をして、うなりながら周りをグルグルとまわっているだけである。映画はここで終わっているのに、この後どうなったか知らないけれども、これなども全く猿山と同じ状態である。

こうして考えてみると、どうもこのような状態は一人猿山だけに限らず、動物の本能なのであろうか。それにしても、人間の学者先生は猿との相違を事こまかに研究し、いろいろな理由をつけて人間の勝れている点を説いている。確かに誰が考えても、猿よりも人間



が進んでいると考えることは常識である。進んでいなければ大変である。けれどもこのような状態は何処に入るのであろうか。

屁理窟は抜きにしても、猿山の騒動は、人間社会にもごくありふれた問題であり、考えなければならぬ問題ではなからうか。春の馬鹿陽気とともに、一笑に臥す問題ではなさそうである。

(三五・三・五)

人間

禽獣の心情をもつて享楽をのみ追うものは、かれの生は、或る時間内に愉快な瞬間が多くあつたか、少なくあつたかに従つて、豊かともみえ、乏しいとも見えるものだ。

生とはただ、無情なるものと永遠なるものとが触れあうところに生れいずる刹那の調和であるにすぎない。しかるに人間とは、この調和を生みだすところのものでもある。

……みずからの存在において、なにが自分自身であり、なにが他者であるか世界において、なにが自分にとって他者であり、なにが自分自身であるか、を識別しうるもの、かかる人間に対してのみ自由も存在も無限もまた存在するのである。

(シュライエルマッヘル・

モノローグより)

大師御生活の管見

慈 鎮 和 尙

村 上 博 了

一

承元五年三月九日改元建暦となった、この午年の冬は、きびしい寒さである、都大路の厚氷は日中もとけずに、にぶく光り、洛中の人々は「なんと寒い年であろうと」寒さにふるえあがっていた。

その十一月十七日、法然上人入洛勅免の宣旨が発表されたのである。下栗田の十輪院（十楽院又は青蓮院とも云う）に隠退していた慈円僧正は、信仰の師表且つは慈父とも仰いでいた上人が、いよいよ入洛近いとし、どこを宿所として迎えるべきか思案にくれた。

かつて住んでいられた吉水の三坊（中坊又は二つ岩禪房（現本堂地）（二）東の新坊

又は松下禪房 又は松下水禪房 又は清水禪房（現三門西南地）を総じて世人は吉水院と呼んでいたが、住む主なく手入れする人もなく荒れるに委せてあった五ヶ年間、見るも無残な荒舎であつて、今更住むことも出来ない有様である。十七日勅免二十日入洛の使をうけたが前の天台座主慈円と雖も手の下しうがなかったのである。

そこで、吉水院に近い大谷禪房（大谷山上南禪院）に迎えることが、何より上人によいとし、人を送って応急処置を加え、内外を清掃して二十日の入洛を待ったのである。

噂は早いものである。二十日朝来洛中の人々は、今日こそ法然上人が東山大谷禪房に、おかえりになると云う噂で湧き立っていた。

当日は拾ったような珍らしくも恵ぐまれ

たよき小春日和、大谷への沿道は歓迎の人波で群れたのである。

一昨年の四月九日の大火で今の元誓願寺通小川の西誓願寺京極近衛の行願寺（飯堂）等まで炎上、バラックの街並は寒々としたものであった。源平の戦乱、度々の大火と世の無常をいやと云うほど見せつけられた人々は、法然上人によって、誰でも一心に念仏さえ申したならば、阿弥陀如来の本願力によって貧富老若男女の別なく極楽往生が出来ると浄土宗の教示信仰によって開眼され、今まで高嶺の花と思っていた仏教が、実は我々の生活の中にありと覺ったことは、法然上人のおかげさまである。出家達と雖も無明の霧が晴れ太陽を仰ぐ喜を味つたのである。僧俗の救世主であつた。

今日ぞ、その生き如来を、この目で拝みこの耳でお念仏を聞きたいとする願望は、つまらぬものでも供養したいと大変な「にぎわい」となったのである、御伝には、

いま上人南海の波をさかのぼり給へば、道俗男女、さきに供養をのべんことをいとなむ、群参のともがら、其夜のうちに一千余人ときこえき

と伝えている。

沿道にお迎えした人々は、我れさきに供養せんと、ものをたづさえて大谷禪房を訪う者が一千有余人もあったと云っている。いくら割引しても数百名を降だらないであつたろうことは想像される。京をはなれて五ヶ年すぎたけれども、人気は依然として落ちなかつたのである。上人が政治経済権力斗争には少しも関与せず、飽までも信仰に生き、阿弥陀如来の大本願力を如来に代つて代演、始終変らなかつたからである。又人によってその応待をかえたり栄枯の沙汰がなかつたからである。人徳と云うべきか全く仏の境地のお方であつたのである。

二

この日の主役であつた慈円（一一五五—一二二五）は、久寿二年法性寺摂政関白忠通公の子息として生まれ、青蓮院覚快（鳥羽天皇第七皇子）法親王の附弟となり当代随一の名門出身である。天台学の秘決をきわめ天台座主となり、その山務四ヶ度三千大衆を統べ、皇室の護持僧であつた。併し無位無官烏帽子もない法然上人と、甚深の關係にあつたことは、勅修御伝中十ヶ所にも見えていることによつて判らう。

ある時、洛西西山の善峯寺に籠居、いよ

いよ宿願の隠遁をはかつたが「いつしか勅使ひまなく」度々の召出しにあつて、私には如何とも出来ない立場となつていた。御伝に、

つねに上人に御対面あつて、凡夫往生の法を、おききになつた。上人は諸宗の主説をあげて、その一々の義理をつくし、最後に浄土宗の称名念仏は苦海の船師愛河の橋梁にもひとしい、凡夫往生のすぐれた道であることを示された。

慈円には、その教旨が充分に理解され、上人に深く帰依していられたのである。上人入寂するや、門下の人々相議して世俗にならうて忌日回向を志した、その六七日忌に施主となり諷誦文に

上人存日のあいだ、しばしば法文を談じ常に唱導にもちふ—略—仏子はこの思によりて、はやく最初の引接をえんと云っている。一体いつ頃からかかる帰依をしたものであらうか、

三

文治元年春慈円三十一才摂州難波（大阪）四天王寺にあつた時、西門外荒陵に、上人を請じた頃ではなからうか。この時上人は、荒陵に草庵（後の一心寺）を結び、

後白河法皇と日想観を共修せられたとするがこの説は国歌万葉記、摂津志・同名所図会等に出て広く信ぜられてはいる、併し事實はその翌二年秋、例の大原問答後ではなからうか。

時に上人五十四才、法印顯真永弁以下門徒の碩学ならびに大原寺の聖達山門の衆徒等を對手として「論談往復すること一日一夜なり」と伝えられるさかんなる浄土を語る会である。当代名流の高徳満座の人々いづれも信伏し、

「かたちを見れば源空上人、まことは弥陀如来の応現か」

と感歎久うし、法印顯真自から香ろをとり高声念仏行道、大衆同音念仏すること三日三夜、その声山谷にみち、ひびき林野をうごかすと云う盛会であつた「僧を起し縁を結ぶ人おほかりき」と伝えられる。ここに僧侶のよさがある、話あつて判れば一さい同入和合、心状は光風清月である。四年後建久元年三月四日顯真は、天台座主となつてゐる。念仏行道の功德がかかるよき果実を結んだとも考えられる。

近代高僧伝

伊藤 無関

大橋 俊雄



周防灘に面し、風光の美にめぐまれ、「南蛮押せ押せ押しゃこそ上る、上る五平太が堅坑堀」とうたわれた石炭の都、毛利家の親藩福原氏一万三千石の旧城下長門国厚狭郡宇部の町に、無関が伊藤善左衛門友規の次男として生をうけたのは文化六年三月二日のことであつた。宇部の町は信仰に生き、よこしまな心をいだく者としていまいと言われ、宇部の人といえはうそごとを言わないと自負することのできるほど、心のねれた人が多かった。伊藤家もその例にもれず、信仰心の厚い両親は掌中に入れてもいたくないであろう彼の将来に大いなる望みをかけ、ゆくゆくは仏門に入

らせたいと願っていた。その彼が伊藤宗家の出で棚井浄名寺に住していた誦誓察善にみこまれ、「この小童は凡骨ではない。他日定めて一宗の法燈を輝かすに至る器となるであろう。自分はこの子を教育して大器たらしめたい」という願いに、父母の喜びは一方ではなく、九歳の夏察善について得度し、名を察音と改められた。彼が無関と名のるようになったのはずっと後のことであり、それは向誓関通上人の徳行を慕い、其の芳躅に接したいものと願い、彼の法諱無礙関通に因んでつけたのに始まるという。

文政八年八月江戸に下り、小石川伝通院に

掛錫して慧戒の門に学んだのは十七歳の時のことであり、居ること三年宗戒兩脈を相承。そして此処に止まるべきか、将又学席を辞したほうがよいかと、肯定と否定をくりかえして進退に迷ったが、時に「当今の僧侶は世俗の僧官になることにのみ汲々として、法然上人の浄土開宗の本意をさぐろうとしている人は少ない。言わば墮勢によって生活しているような状態で、僧侶本来の立場から遠ざかることになりかねない。若し予が長くここに留まるとすれば、彼等同様例え学業は進歩するとしても、恐らくその隊中に墮してしまふことになるのではあるまいか」と深く反省し、そのような教界の中にあつても、未だ道行のすたれていない律院の門を叩き此処で修行したいと、帰国の途次美作国誕生寺に持律堅固の大比丘僧察嚴慧顯和上をたづねて入律することになった。きびしい浄土律をたもつことは容易ではないが、それを敢てたもうとした青年僧は全く求道の念にもえ、酒肉葷辛をたち日夜念仏に精勵した。凡そ寺院には教院と律院の別があり、教院は有縁の化益を旨とするため、時に酒や葷肉を用いることもあつ

たが、律院はここに住する人が自身修道を目的とするのであるから、これらの一切をしりぞけたのである。その後天保十四年三月粟野昌泉寺に住し、安政五年七月新別名大願寺に移り、文久二年六月萩報恩寺に転董したが、此頃国論は攘夷と開国にわかれ、これがまた佐幕や勤王と結びつくなど世は騒然として帰するところを知らないという有様。時に幕府は開国論をかがげ、長州藩はこれに反対して勤王攘夷をとえ、京都の大勢は公武合体にかたむいていた。そのような世相の中にあつて、あくまで勤王攘夷をおしすすめようとする長州藩は三家老が兵を率いて上京し、朝廷に嘆願したが容れられなかったため、元治元年遂に兵をおこし蛤御門の変で朝敵の冤罪を蒙り、国内の人民は誰でも、それが僧侶であっても、国法をもって管外に旅行してはならないことになってしまった。

国外に出てはならないとすると、僧侶となるため受けなければならない伝法相承のため檀林に遊学することすらできない。伝法をうけなければ僧となり、住職になることもできず、従つて住職が欠けても後董を得ることが

できない場合もでてくるであろう。一年二年それが三年五年も立つと、がまんすることが出来ず、僧侶となることを断念し還俗する者も現われ、或は脱走して東上する者も三十余人をかぞえ、国法を犯したかどで処罰されるものもでて来た。この上は防長の地に修学道場を設立し、伝燈が維持できるようにしなければならぬということ、無関は藩主の命をうけて上洛し、先づ知恩院に出頭してかけあい、らちがあげないままに東京に赴き真意を増上寺に訴え、再三にわたつて交渉の結果明治二年十月学場の設立と伝燈許可の証書が下され、翌三年八年ぶりで伝法をうける機会があたえられた。時に伝燈師として選ばれたのは浄国寺の養鶴徹定であり、寮主に山下現有、教授に岸上恢嶺が招かれ、以来同七年十一月まで四ヶ年にしかすぎなかったが、防長で伝法があつたことは浄土宗伝法史上特筆すべきことであつた。

彼は堅忍不拔扶宗護法の念の極めてあつた人であつた。或時明教新誌に「伊藤無関師は元来解行優美の老宿にて、県内僧侶の模範ともなるべき護法篤志の人」であると報知した

記事を見た彼は、「無関も十有余年、宗学校とやら何とやらにて種々心配は致したようなものの、無学無識なれば成功などは豪もこれなく、只昔の行掛りにて六十八の今日も糊口の為と云われても無所論。蹉跎々々して居るのみなり。然るに右様な名声が世間に出ては耻かしくて生前人に対面が出来ませぬ。されば間違とか虚説で有ったとかして下さる様、合掌して頼み奉つり候」と訂正を申込まれたが、これに対して大内青巒は「此程真宗の赤松僧正も師の道德たかきを話し、歎賞せらるるを親しく聞き平常恋慕し奉る……斯く名声を悪み、耻かしくて人に対面ならぬとまで仰せらるる御報知は、実に初めて拝読し有難きこと限りもなく覚え涙を流しました」とつけ加えている。もつて彼の謙虚な姿を見るとができ、同九年には権少教正にすすみ、翌十年知恩院庶務課長に就任、越えて十七年二月十一日称名念仏のうちに世寿七十六歳をもつて安養の浄土に旅立たれた。法名を玄蓮社幽誉上人聴阿察音無関老和尚という。

×

×

西池園記

(下)



牧尾良海

誠叔は、今一度かの女性に会いたいものだぞと、まるで熱病にとりつかれた様に日夜その面影を想い慕っていた。

時候は折しも暑いさかりであつた。彼は自分の房を出て、役所のホールから渡廊下へ続く涼しい所で風をいれていると、例の女中が手紙をもって入って来る姿が眼についた。急いで椅子から立ち上って、女中のさし出した書面を開いてみると、詩が一首だけ記してある。

「月余消息無く信書も断ぜり、
君、田翁に問いて委細を知悉せり。」

酒を沽りて秘かに前古の事を思う。

鄭生はこれ賦情の人なり。

誠叔は、その女中が利口そうで美しいのを見て、

「私について私の部屋までおいでなさい。」

と言つた。自分も詩を作つて、かの女性に答えようと思つたからである。

ところが、女中が入つて来ると、誠叔は誰も見ていないのを幸いに、急にその女中を抱こうとした。女中はその手を拒ぎながら、

「そんなことをなさつてはいけませんわ。妾風情が勿体ぶつて申し上げる訳ではありません。」

あのお嬢さまときては、御性質がきついお方ですから、もし貴方さまの言いなりになりましたら、それこそ生きてはおられません。貴方に身を許したりしましたら、お嬢さまの手前をうまく逃れてごま化すことなどできません。本当にいけませんわ。」

と言つて、必死に逃れようとしたが、力が弱いので遂に誠叔に抱きすくめられてしまつた。

やがて女中は、力なく立ち上つて帰ろうとしたが、門を出るとき彼に挨拶をのべた。

「貴方の様な立派なお方のお情けを頂いたのですから、自分の身を惜しいとは悔いておりません。でも、もう二度とはお目にかかることはございませんでしょう。」

女中は涙を流して別れを告げて出て行つたが、又戻つて来て、

「今度、某という園地へ行つて下さいま

せ。その北の方に、小高い丘で草の多い墓地があります。そこできつとお嬢様にお会いになれますわ。」

と言ひ残して姿を消した。

誠叔は、やがて約束の日に指定された所へ行つてみたが、ひっそりしていて人影一つ見えないのである。真夏の日盛りの時なので、とある木蔭で寝ころんでいたが、そのうちにぐっすり寝こんでしまった。

眠を覚ましたときには、太陽は沈んで薄暗くなりかけて来た。ねぐらへ帰る鳥も林の中へ入り、夕風が吹き始めて、暮色が万象を包もうとしていた。彼は驚いて帰り仕度を始めたが、都城の各大門はもうすっかり締められていることに気付いて、はたと当惑した。

この時、突然誰かが林の後方から出て来る様子である。夕闇をすかしてよく見ると、例の女性なのである。誠叔は再会を喜んで、何から話そうかととまどいしながら「随分長いこと、私をほっておきましたねえ。」

と、うらみをこめて言った。女は、

「ここには妾の別宅がありますから、そこへどうぞいらつして下さい。」と、彼を誘つて連れて行つた。

「醜い妾の本性のことを、貴方はもうとつくに御存知の筈です。今更隠しても仕様がありませんから、こうしてもう一度お目にかかれる様に図つたのでございます。」

女は、下をうつ向いたまま詫びを言うのだったが、しおたれながらも美しさは溢れんばかりで、はじらいと諦め、慕情と自棄とが軟かい姿軀の中にいじらしくも戦っている様で、誠叔も同情の念がしみじみと感じられるのであった。

「いやしくも男と生れた以上は、詩情と風流を解さねば生きている甲斐がありません。眼前に美人が控えており、之に加えて一掬のうま酒があるのですから、それで私は憂いも忘れますよ。」

そこで、燭台を高く掲げ、席をしつらえて二人で酒をくみ交した。お互いに盟いの言葉を述べ合い、行く末とも変らぬ節操を確かめつつ鬼神にもお祈りを捧げたのである。

二人は、日中は酒宴をし、夜は共に寝るという風で、凡そ十日ほどがこうして濃やかに経過した。

ある日のこと、女が言い出した。

「貴方は、明日から四五日ほど、お帰りになつて下さい。妾も追っかけ参りますわ。妾達の為に余り人目につかぬ小綺麗な屋敷を一軒みつけておいて下さいまし。お隣に変なのがいちたのはいやですわ。君子の住居は、必ず隣を択ぶと言いますもの。」

この夜も又酒宴になった。間もなくかの女の侍女が、

「王夫人がおみえになりました。」と言つて来た。誠叔も喜んで出迎え、三人で一段と賑やかに語り合つた。

「奥様は、一体どうしてこんな所においでなですか？」

誠叔が訊ねると、王夫人は急に惨ましく面持を変えてうつむき、涙にかきくれているが、ややあつて美しい顔を上げた。

「妾は、実はこの世の者ではございません。梁の朱高祖の第二王子の夫人だった者

です。まだ宮中へ上らなかつた娘の時分に、高祖が攻めて来られて、妾を見て本国へお連れになったのです。」

「私は長じてから五代史を見ましたが、朱高祖の行跡は本当に非道なものです。史官の筆の間違いかと思われるほどですが、実際にあんなことがあつたんですか？」

夫人の容貌はいよいよみじめになつて、口にのぼせるのも恥じている様子であつたが、やがて思い切つて話し出した。

朱高祖の残酷な気性や、長男である友生に殺されて位を奪われるに到つたそのてんまつは、聞くも陰惨なお家騒動の内幕で、血しぶきの匂いすら漂う様に思えた。

夫人の長い物語りはいつ果てるとも見えなかつたが、夫人の侍童が出て来て、

「前朝の出来事は、言えは言うほど憤りが増すばかりですから、もうそのくらいでおやめになさいましたら？」

と言つたので、古い話はそこで切れて、又酒になり、楽器も持ち出されて宴も一段とざわめいて来た。

やがて夜半になると、王夫人はいとまを告げて帰つて行つた。

曉方、誠叔が愈々帰ろうとすると、女は「とにかく急いで屋敷を見つけることをお願いしますわ。妾もすぐに参りますから。」

と念を押して彼を見送つた、

誠叔は、新宅を借り受けて二三日そこに引きこもっていると、かの女性もやつて来た。

大層な支度で、調度財宝もふんだんに持つて来たので、試叔もそれからは満ち足りた贅沢三昧な生活を送ることができた。

その後、彼等は長らく都内に住んでいたが、官途につく費用は何から何まで女の持参金で用を弁じたのである。かの女は誠叔の官位が進むにつれて、家を治めることができますます厳しくなり、いやしくもふしだらなことは許さなかつた。使用人に対しても

礼法通りに之に臨み親戚に対しては恩愛を施す様にして、何事をするにも少しもそつがなかつた。暇な時には何かと論議するところがあつた。誠叔が間違つた考え方でもして

いると、かの女は必ずそれを言いくるめてため直すのであつた。彼が何かをする場合は、必ず女から口を出し、どんな瑣細なことでも凡て女に相談をするという風であつた。普通の人と変つたところは特になかつたが、ただ、髪の手入れとお裁縫とは、やつている所をついぞ人に見せたことがなかつた。夜が明ける前には、すっかり髪を梳き髻を結んでいて、いつそれをするのか誰も知らなかつた。牛や羊や豕の三牲を始め、鹹酸辛苦甘の五味は勿論、茶菓の類は皆食べたが、野獸の類には全然手をつけなかつた。酒もほんの二三杯嗜むだけで、それ以上は辞退するばかりであつた。そのほかの事では、これといつて変つた点は見られなかつた。女はたまたま子を生んだが、不思議なことには数日たつとそれが見えなくなつてしまつた。

こうして前後七年ほどの歳月が流れ、誠叔は始めて都下の官に補せられたが、所用で相国の所へ出向いたとき、たまたま建竜孫道士に出会つた。道士は彼を一見すると驚いて、

「あなたの顔つきは普通の人大層違っていますよ。」

と、注意してくれた。

「どういう訳でそんなことを仰言るのですか？」

「一体、人間の相というものは陰陽二儀の正氣が本となり、その上を高厚の氣が覆うているものなのです。今、貴方の人相を拝察しますのに、正氣が邪氣の為にうばわれ、陽が陰に侵されており、五体為に衰え、齒ぐきが黝んでいて、お顔色も悪く、色もさっぱり冴えておりません。壮んな所が少しも見えないのです。貴方は今必ずや妖氣のものに惑わされておられるのです。若し、人に隠して己れの非をお悟りになるのであれば、必ずや死ぬこととなりますでしょう。」

人の人たる所以は、生命の重要さと礼儀の尊とさを知っているからです。今、貴方は異妖なものに溺れて居られるが、生命を知るものとは言えません。又、そんな妖邪のものに惑乱されるのは礼儀を尚ぶ者とも言えません。そのうちに貴方の屍が野外に

ころがっているという様なことにならねば良いのですがねえ。」

誠叔は道士のこの言葉を聞いて、内心大層懼れを抱いたが、ただ外のことにかこつけて生返事をしながら、實際のことは打ち明けないでおいた。帰ってから、うかぬ顔をしているので、女がつめよって聞き訊すと、始めて道士の予言したことも話した。女は笑って、

「あんないんちき道士の世迷いごとなど、信ずるに足りませんわ。妾は、貴方が妾のことを深く思っていて下さるからこそ貴方に従っているのです、その為に貴方がおやせになっただけです。之をお飲みになつていらっしゃれば、何でもありませんよ。」

こう言つて、女は薬をとり出して誠叔に服用させたのである。一月ほど経つてから、又孫道士に出会ったが、道士は彼の様子を見ると吃驚した。

「これは驚きです。貴方の今日のお顔の様子は、神氣が澄み、形もちゃんとしております。何だか、ますます変ですねえ。」

女から薬をもらつて飲んだことを打ち明けると、

「妖怪が貴方を惑わしているに違いありません。貴方は氣が付かれていないのですよ。」

こうしたことがあつてからの或る日、誠叔は女に言った。

「お前も何彼と私の世話が大変だろうから、側女を一人おきたいと思うが、どうだろうか？」

かの女は不承知であつた。尚もしつこく彼が頼むと、女はきつとなつて言った。

「もう先にも貴方は、妾の女中を犯したことがありました。覚えておりますか？あの娘はすでに海外へ放逐してしまいました。貴方が若し、どうしても側女をお困りになるのでしたら、ただではおきませんか、そのお積りでいて下さいまし。」

側女の件はこの一声で沙汰やみになった。

誠叔には、母方の実家が南陽にあり、大層な金持であつたが、このところ十年ほども会っていないので、一度訪ねてみることに

にして女に別れを告げた。

「一月と経たぬうちに戻って来るよ。お前はその間静かに門戸を閉じて待っていておくれよ。」

女は涙を流して別離を惜しんだ。

「貴方、どうぞ新しいひとに目移りしたり、眼前の利益の為に義理をお忘れにならないでね。」

鄧の地へ寄ると、実家では大喜びで彼をもてなした。この南陽の太守は、誠叔には上官に当る人であった。

「貴方には、長い間欠員がない為に都下で待機してもらっていたんだが、この際何とか椅子を一つ工面して、貴方に就任してもらおうようにしましょう。」

太守はそう言つて、飛脚を出して申請をしてくれた。

「お前はまだ独身なんだろう？」

実家の伯父がきくので、もう結婚している旨を言つと、

「その嫁は、どこの何氏の娘なんだ？」

と追求するので、いい加減の返事をしておいた。伯父は何だか臭いなと思ったもの

か、幾日か経つと、伯母も交えて究明して来た。その時にはいくらか酔っていたので、ついつい本当のことを話してしまつた。

「お前は靈長の人間なんだぞ。そんな妖怪に魅入られているなんて、断じて許すことはできぬぞ。」

怒った伯父はどんどん話をすすめて、郝氏という人の娘と誠叔とを結婚させた。郝氏も豪族の出なので、婚礼がすむと誠叔もこの新しい妻に夢中になり、心も大いに安らぎを覚えた。彼は間もなく鄧で仕官したが、人には隠れて例の女に手紙をやり、いきさつを記して諒解を求め、それとなく別れようという気持ちを仄めかしておいた。

間もなく、女からは返事があつた。

「士たる者は、義を忘れることはできぬものでありますのに、忘義反覆すること、貴方より甚だしい者を知りませぬ。恩は負き得ても、己が心は安んじて欺くことができるものですか？ あの時誓約は一片の反古となりましたが、神明までをないがしろにして、それでよろしいものですか？」

窮迫していた貴方をお救いし、何不自由のない様にして上げたのは妾でございます。

贅沢三昧にお過しになれたのに、もうお忘れなのでございますか？ 妾は貴方にそむく様なことを何一つ致しませんでしたのに、貴方は妾にそむく行いをなさいました。今後はたとえ貴方が溝の中で死に類しておられようと、妾は手をさしのべることを致しますまい。女とは言い条、義として必ず貴方にお報いをするつもりです。ゆめゆめお忘れなき様に。かしこ」

その後誠叔は任期が満ちたので、妻を伴って汝海に家を持つべく、先に独りで京師を出発する積りでいた。所が急に遠く広州の徵兵官に命ぜられたのである。彼が任地へ出発して数日後のこと、忽然として一人の使いが手紙を持って妻の郝氏の許へやって来た。それには夫の筆跡で、

「私は広州の長官の推挙で、この州の兵官を授けられた。至急に仕度の上、この地へおいででありたし。」

とあつた。使者はなおつけ加えてこう言つた。

「旦那様の申さるるには、奥様は東路をとって洪州からおいでになる様にとのことづけてでした。」

郝氏は早速旅装を整え、馬を買い求めて夫の任地へ向けて出発した。同じ頃、誠叔は広州に居たが、彼も亦妻からの親書をうけとった。

「妾こと、枕も上らぬ病床につき、明日をも期し得ぬ重態でございます。貴方がすぐにもお帰り下さるならばいまわの際にでもお目にかかれますが、さもなければ生きて再びはお目もじ叶わぬことでありましよう。実兄が荊州までお迎えに出てもらいましたから、何卒兄と一緒にお帰り下さいませ。」

誠叔は驚ろくまいことか、急いで広州から京へ帰りついたが、郝氏はもう居なかった。郝氏の方も広州くんだりまで出向いたが、誠叔とはかけ違つて会えなかった。

一年余り経つて、二人は京師でやっとめぐり会うことができたが、何人のなせる仕業なのかと、手を取り合つて慟哭したが、こんなことの為に家産もあらまし蕩尽して

しまった。

一日、夫妻がしょんぼり対座していた時誰かが一通の手紙を投げ入れて行つた。

開いてみると、

「少しばかり小細工を施して、二人を苦しめてあげました。今、おふたりの愛情は深い様ですが、そのうらぶれのお姿は惜しむべきことです。」

と記されており、何の署名もなかったが、誠叔には例の女の仕業に違いないと判つた。

一年経つと、妻の郝氏が死んで、彼も又失職してしまつた。或る日、誠叔がぼろを着、埃にまみれたひどい恰好で都城の宋門から郊外へ出ると、美々しい車馬の行列が彼の傍をすぎて行つた。車の簾を掲げて呼ぶ者があつた。

「貴方は候誠叔ではないのですか？」

「そうですが、貴方はどなたでしょうか？」

いぶかしんで誠叔が見上げると、

「妾ですよ。今では既に他家へといつています。貴方はひどいお姿ですが、昔、貴

方と一緒にいた頃のことを思い出すと、何だか同情を禁じ得ませんわ。」

と言つて、従者になにがしかのお金を彼に渡すように言いつけると、再び簾をおろし、軽やかに車の壁をまき上げながら、遙かな縁の広野の方へ遠ざかつて行つた。

（青瑣高議別集卷之二）

◎宗祖法然上人七百五十年

御忌記念出版

望月信道老師再編

○定価 金壱千三百円也

○郵送料 壱部金七十円也

浄土宗聖典（A6版本文）
千四百七十六頁

浄土宗聖典刊行会出版

申込所 浄土宗教化団中央本部

東京都港区芝公園一九号地

振替口座東京六一九三九番

声



創価学会におもう

本誌を拝読させて頂きまして、はや三年御執筆の諸先輩のご研鑽に敬服いたしております。一読者の声をご笑覧下さい。

こんなことがございました。お檀家の告別式に臨んだときのことでございます。一堂水を打った静けさの中で下矩が始まりますと、一人の中年のご婦人が珠数を摺り合せてお題目を唱え始めました。あたかも妨害するかのようには聞えてなりません。阿弥陀仏のご誓願を誹謗されているようで、少なからず憤りを感じたのでございます。私の未熟をお笑い下さい。

近年、新興宗教の進出は、私が申し上げるまでもなく、異常なものでございます。憲法で信教の自由は認められているとはい

え、自由即不自由の現実でございます。

ある時、お檀家の方から創価学会の勧誘に閉口しているのだが、なにかよい方法はないものだろうか、と相談を持ちかけられたことがございます。そのご家庭は、奥さんの永年の病床生活に暗い陰があつたわけでございます。溺れるものは藁をも掴むの譬で心の迷いも仕方のないことと思ひます。

私はその方に先づ、貴方は創価学会をどのようにお考えになりますか。と質問いたしますと、私は不信仰で何も分りません。しかし、会員になれば即座に病もなおり、生活も豊かになるということであるからと言ふことなのです。私はただ信仰のみで病がなおると考えるのが誤りです。家庭内の暗さも奥さんの病氣全快と同時に取り消されてしまうことでしょう。先決は奥さんの病氣全快にあるのです。物心両面から充分ご養生なさい。と言ふことでその日は帰られました。しかしながらその甲斐もなく、それから間もなくその奥さんはなくなりました。

丁度、初七日に寺へ詣られて、こんなことになってしまいました。結局、創価学会

に入つたことが妻の死を早めたことになるのでしょうか。妻も会員になることを望んでいたのです。と涙ながらに話されたとき、私もその話を聴いておりまして同情の涙を流したのでございます。今、私が貴方にこのようなことを申し上げることは酷なこととは存じますが、私の見解を申し上げます。

三十六才の若さで此の世を去られたことは仏自身より取り残されたご遺族のお歎きは計り知れぬものと存じます。しかしこの現実には打ち勝つ勇氣を持っていたいただきたいと思ひます、と前置きして、私は創価学会を真の宗教とは思っておりません。極言すれば、宗教的な無知な方々を利用した政治結社だと思ひます。と申し上げますと、その方は意外だという顔をされました。静かに言葉を續けて、

憲法によつても人権の平等が叫ばれている昨今、未だに人権の差別が行われ、この問題は日本史上、歴然とした事実でこの虐げられた人々の不満が、社会主義運動とタイアップして平和対策運動となつたわけですが、しかし勢力も微力のために、宗教の現世利益を旗じるしに資本主義政治の崩壊

をたくらむ革命運動なのでございます。この運動の裏付けには、前回の参院選挙で明白であるように、創価学会を基盤とした立候補者が全員当選の現象、また創価学会の幹部と言われる青年層は札付きの全学連くづれがリーダーとなっており、また地方選挙の違反行為も組織票をもつ学会会員が多数を占めている事実も挙げられております。

このような団体のどこに魅力があるのだろうか。これを分析すると、一つには、幼稚ではあるが人間生活の弱点をついた現世利益、二つには、家庭夫人の余暇の利用、三つには、本山団参と称して慰安旅行など挙げばきりが無いが、やはり社会主義の根本は労働者の味方であると言うことが一番の魅力と考えられます。

果してこのような団体を宗教と言えるであろうか。我々宗侶はこのような事態にある宗教界を黙認していてよいのであろうか。昭和三十六年は宗祖七百五十年大遠忌の年であり、報道界の大衆宣伝に酔わされて、ただ、宗祖の偉徳を偲ぶばかりではなく、このような迷える衆生を済度することが、我々浄土宗侶に課せられた使命と思ひ

ます。われわれは阿弥陀仏の本願を信じ、極楽往生の義を明らかに説き、阿弥陀仏の大慈大悲に報恩感謝の生活を実践するとともに、念仏信仰を普及せねばならぬ事を記念すべきこの年に再認識するのであります。(瀬高哲朗)

少年の教化

謹啓、浅春の砌諸先生方には教化の爲に、一方ならぬ御尽力被下衷心より感謝致しております。浄土に童話など載せて頂けないものでしょうか。御無理なようでしたら。少年の教化になるような仏教雑誌を毎月編集出版して頂き度く念願いたしております。

キリスト教では二十年後の信者を造るのだと云って、少年教化に懸命な努力を続けております。仏教でも、もっともっと積極的に少年教化に力を注いで欲しいものだと痛感している次第です。一言呈上しました。

合掌

(神戸市兵庫区塚本通二丁目八ノ五

神谷哲亮)

お願い

「浄土」三月(特輯)号、殊に座談会「法然上人を偲んで」は誠に感銘深く拝見致しました。

二十七年の永きにわたり御編輯の御苦心に対し、厚くお礼申し上げます。

又々勝手な御注文申し上げますみません。が、NHK人生読本に三回にわたり御放送下され、今朝で終了しました佐藤賢順先生の「法然上人の人と言葉」の玉稿が「浄土」誌上に、或は単行本として再録して頂ければと願っています。

合掌

(大津市石山外畑町三六一

浄光寺俊徳)

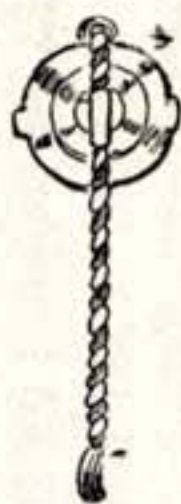
× ×

× ×

随筆

学友の山川君が、娘さんを連れて訪れたのは昨年の秋、良く晴れた十一月の或る日曜日であった。その前からも一寸話はきいていたのだが、山脇短大に在学中の娘さんに入社試験を受けさせるべく、私は初めて会ったのである。人の倅には兄の倅がある

学友の子女



安藤 正男

とはよく言うが、父親の青年時代に良く似たその明るい眼ざしは、いつか私を三十余年も前の学生時代にひき戻して、様々なことを想い出させるのであった。

その頃（昭和三年）——。友も私も葵ヶ

丘の大倉高商（現、東京経済大学）の夜間部に通っていたのだが、娘さんの横顔を見ていると、それが何時か友の横顔のイメージと重なり合い、細い思い出の糸は蜘蛛の吐き出すそれのように涯しもなく伸びて行ったが、何と言っても学窓時代のことが一番多い。昼間それぞに仕事をもつ身には、学期末の試験も仲々楽ではなかったが、豊島園の運動会やら、代々木原の軍事教練など、忘れ難い思い出も多いのである。

松原に飛脚小さし雪の朝

狼の声揃うなり雪の暮

この二句は三十余年前、入学試験の国語問題の一部であったのだが、それが今なお記憶に残っているのも懐しい思い出である。

さて、娘さんは入社試験を見事パスして愈々四月から出社する運びとなった。父親である友の欣びや、紹介者である私の欣びもさること乍ら、今更のように痛切に感じ

られるのは、知らぬ間に動いていた大きな『時代の歯車』である。

『お互いにまごまごしては居られないね』それまで友と会う度毎の、それがどちらから言い出すともない合言葉のようなものであったが、そんな時もうとうとう来て仕舞ったのだ。

憶えば昔共に苦学し、共に語り合った学友の子女が、その人生の第一コースを了り、社会人として巣立って行くのである。この稿の活字に組まれる頃には、既に配属の部署も決まり、彼女は元気なその姿を見せている事であろう。

——若しかして自分の課に来るのではないか？——そうした何か面映ゆい様な予感がないでもないが、然しそれなら猶のこと便宜なのではないかと思う。

人生は流転と輪廻の約束の前に、常なき禍福を繰り返している。世の荒浪にもめけず、順風満帆の安らかな船出を、父としての友は願っている事であろう。そして三、四年の後には、それが又私自身の立場とも変るのである。（筆者は日活会社勤務）

☆☆信仰の「泉」浄土トラクト☆☆

新刊

浄土トラクト

在家の方々の為の

村瀬秀雄著

浄土宗勤行の解説

新書版九〇頁
定価七〇円
送料八円

待望の書「浄土宗勤行式の解説」愈々刊行

旧版「浄土宗日常勤行式解説」を全面的に

改訂、版も持ち易い新書版として刊行

(百部以上五分引送料無料)

大正大学教授 佐藤良智著

真理のはなたば

新書版
定価七十円
送料八円

若き人びとにおくる仏教入門

青年会 婦人会に最適のテキスト

東京都品川区上大崎一ノ七八二

申込先 法然上人鑽仰会

振替東京八二一八七番

今年も「浄土」で明るい生活を

「浄土」購読規定

一部 定価 金五十円

(送料 四円)

会費一カ年

金六〇〇円
(送料不要)

浄土 五・六月号

昭和十年五月廿日

第三種郵便物認可

昭和三十六年五月廿五日 印刷

昭和三十六年六月一日 発行

定価 五十円

編集人 村瀬秀雄

発行人 佐藤密雄

印刷人 神谷秀雄

印刷所 神谷印刷株式会社

東京都品川区上大崎一ノ七八二

発行所 法然上人鑽仰会

振替東京八二一八七番

全国寺社仏閣

お守り
お守り袋
おみくじ
兵円守り
おしやもじ

御用命は左記へ

株式会社 飯塚商店

東京都葛飾区小谷町九五
振替 東京 四九四四三番
TEL (697) 二八九二番

昭和十年五月廿日 第三種郵便物認可(毎月一回一日発行)
昭和三十六年五月二十五日印刷 昭和三十六年六月一日発行

日本一の生産・設備

梵鐘 (54cm~85cm)

在庫豊富

喚鐘 (21cm~51cm)

音響理 学博士青木一郎先生

梵鐘界の権威 日展 参事 香取正彦先生
芸術院賞受賞



日本最初の黄綬褒賞
(昭和三十年四月廿七日)
鋳物師 老子次右衛門翁

大阪市北区曹根崎町一丁目

大阪ヨリ十五分(梅田新道大映横東へ一丁右側)

株式会社 老子製作所 大阪支店

電話大阪(34)8847番 本社工場 高岡市横田

浄土

第二十七卷

第五号

定価金五拾円(送料別)